様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２５ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６３７０４１７

研究課題名（和文）傅増湘の古典学と伝記･詩文に関する基礎的研究

研究課題名（英文）Fundamental Study on Fu Zengxiang's Classical Studies and Biographies / Poetry

研究代表者
稲畑　耕一郎（INAHATA, KOICHIRO）

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：３００６３８０３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：　傅増湘は民国を代表する古籍善本の大収蔵家として知られる。それらを駆使してなされた文献学、校勘学の成果は中国古典学のテキストを知るための確かな仕事として高く評価きている。その一方で、傅増湘がなぜ古典籍そうした分野に生涯をかけてのかについては、まったく触れられないままに来ている。
　本研究ではその伝記研究と残された詩文の収集整理を中心として進め、それに基づいて傅増湘の学問の全貌を明らかにした。傅増湘生きたが百年前は、最後の王朝としての清朝が滅び、社会のすべてが伝統に見向きをしなくなった時代である。この時代に、伝統文明の砦としての古典籍の収集とその整理に邁進したのが傅増湘であったことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：Fu Zengxiang is known as a large collector of Chinese old books during the Republic of China. He also studied them, and his results have received a high evaluation as a basis for understanding the texts in Chinese classical fields. However, we have never studied why Fu collected and researched Chinese classics.
　For that reason, in this research, I have focused on biography research and collection/organization of his poetry. Based on this, I revealed the overall picture of his discipline. He lived a hundred years ago, when the Qing as the last traditional dynasty had been destroyed, and society not only did not recognize the value of tradition, but actively rejected it. In this period, Fu Zengxiang collected and studied old books as a defense of traditional civilization.

研究分野：中国古典学

キーワード：傅増湘　民国の古典学　詩文と遊記　文献学　古玉研究　内藤湖南　雅言　蓬山話旧

１．研究開始当初の背景

傅増湘は民国時期を代表する大蔵書家であり、自らが収集した古籍善本を駆使して、古典籍の校勘に力を尽くした学者である。そればかりではなく、その蔵書のなかから選り勝りのものを、中国古典のテキストとして今もなお広く信頼を集めている商務印書館発行の「四部叢刊」初編・続編や「百衲本二十四史」に四十近い善本古籍を提供し、学界に大きく貢献してきた。その代表的な著書である『蔵園群書経眼録』（中華書局、1983 年）、『蔵園群書題記』（上海古籍出版社, 1989 年）、『蔵園補訂郘亭知見伝本書目』（中華書局、1993 年）などは、中国古典のテキストを知るにあたっては、まず手にとって参考にすべき著作となっている。

そうであるにもかかわらず、日本では中国文学・史学・哲学のどの分野の研究者からもあまり関心が向けられてこなかった。日本では一篇の傅増湘に関する研究論文もなかったのが実情である。中国でも、その膨大な蔵書に関しては多くの人々が称賛して已まないものの、他の業績についてはほとんど触れられないままに過ぎてきており、大蔵書家、文献学者という理解の域を出ないにままで終わってしまっていた。

私はかつて参加した「21 世紀 COE プログラム」のプロジェクトを実施する中で、たまたま台湾中央研究院の傅斯年図書館に所蔵される宋蜀刻本『南華真経』を調査することがあり、そのなかに傅増湘の自筆の「題記」と「題詩」が綴じ込まれていることを知った。宋本の中に自らの筆で記した長文の題跋と題詩とを綴じ込むという行為は、さらに千年後にまで自己の存在と成果を伝えんとした行為である。そこに傅増湘のこの学問にかける思いと自負を強く感じた。その詩文も筆跡また傅増湘の並々ならぬ才覚を示すものであった。

その後の調査で、「題記」と「題詩」はともにすでに『蔵園群書題記』に収録されているものであったが、それとはかなりの部分で異同のあることがわかった。その対比調査の成果は、「宋蜀刻本『南華真経』附載の傅増湘手書題詩題跋について――台湾中央研究院傅斯年図書館蔵本」、『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第 54 輯、2009 年）として発表した。

そのころから、なぜこれほどの古典学者について中国古典研究者の間でも無関心のままに放置されてきたのかについて疑問を懐き、その古籍に綴じ込まれていた別の「題記」にあった「蓬山話旧」なる「雅集」を調査することから調査を始めた。その雅集の成員はすべて清朝での科挙の及第者である翰林院に所属した人々であり、いわば守旧派の学者であり、文化遺民とも言える人々であったが、この百年の間に私たちの学術界がこれらの人との存在と学業を十分に評価しないまま看過してきたことがわかった。

その根底に近代における中国の古典学が、この学問が本来的に有してきた人文学の総合性を無視して、文学・史学・哲学に分化しただけでなく、さらに特定の時代やジャンル、あるいは人物だけに焦点を当てた研究を進めるあまりに、この豊饒な世界が持っていた魅力と価値を著しく減損してきたのではないかと考えるようになった。

中国古典学の衰退は社会がそうした教養を必要としなくなったというばかりでなく、その研究者自体が研究の深化を求めるあまり、結果的にこの学問を些末化し、この学問が持つ豊饒な世界の魅力を蔑ろにしてきたことにつながった。いわば中国古典学の総合的な理解力の涵養を怠ってきたことの責任であることを痛感せざるを得ない。たとえば専門家を称する人たちの間でさえ、中国の古典文化である詩・書・画などについての教養が著しく低下しているのはその象徴的な現象である。

そこで、詩文の応酬や書画の鑑賞、古籍の情報交換などを通して人々が集う「雅集」の存在に注目し、その中心メンバーであり、主催者でもあった、傅増湘の生涯と詩文を探究することを手がかりとして、危機に瀕していると言われ続けて久しい古典学研究の再興に向けて何らかの示唆が得られるのでさはないかと考えて、この課題の研究を開始した。

すなわち、本研究の最終的な目標は、民国期の中国古典学の学問のあり方を探求することで、今日な課題であるある古典学の復権に繋げる手がかりを得るということであるが、その一つのケーススタディーとして、傅増湘の古典学を解明することから始めることとした。

２．研究の目的

1911 年、最後の王朝としての清朝が滅亡し、翌年に中華民国が誕生すると、新しい時代の到来とばかりに、その時勢の中で、いわゆる「新文化運動」が澎湃として起こり、伝統的な学問や芸術は総じて時代遅れのものとして無視されるか、無価値なものとみなされ、甚だしくは批判の対象とされた。その文化運動は「伝統に反対し、儒教に反対し、文言に反対する」などをスローガンとし、学生を中心とした若者たちに支持され、やがて社会の風潮となっていった。古典的素養の有無を無価値とする時代の気風が生み出された。ここに今日の古典学の危機が叫ばれる原点がある。

こうした社会の文化状況の中で、古典籍は無用の長物のように見なされることがあり、紫禁城に保存されていた多くの貴重な清朝の文書や宋元以来の歴代の古書が頻繁に市中に流出した。知識人たちの一部はこれに心を痛め、これらを文化遺産として守り、次の世代に継承しなければならないと考えて、さ

まざまな方法でその研究と保存に取り組んだ。このグループの知識人たちは、一種の守旧派とみなされたが、百年を経た現在から見ると、声高に伝統の打破を叫び新しい文化を創造しようとした一群の人々とは異なった方向で、困難な逆風の中でもそれまでにない多くの古典学の分野での業績を残したことがわかってきた。

その代表的な学者の一人が傅増湘であり、その生涯と事跡の研究を本課題の最も核心的なものとした。それには、文献学の成果としての上記『蔵園群書経眼録』（中華書局、1983 年）、『蔵園群書題記』（上海古籍出版社, 1989 年）、『蔵園補訂郘亭知見伝本書目』三書を読み解くだけでは十分ではないと考えた。なぜならそれらはいわば客観的な事実に基づいた目録学の類の書物であり、丹念に読めばそこにも傅増湘の哲学があり、美学が存在していることはわかるものの、如何せん生身の傅増湘の姿が現れにくいものであることは否めなかった。

そこで、遺された詩文や書簡などを通して、生涯、事跡、その間の交友、また人生についての思想や美学を探求することで、なぜ傅増湘が生涯を通して憑かれたように古典籍を探し求めたのか、その意図はどこにあったのかを明らかにしようとした。しかも傅増湘は最終的にはそれら膨大な古籍善本を北京図書館（現在の中国国家図書館）などの公的な機関に寄贈することを子に遺嘱してこの世を去った。古籍の収集は学問のためであり、それに象徴される古典文化を守り、継承することにあった。

こうした生涯を明らかにするには代表作と目される前記三書では不十分であり、その他の資料によってそれを支えた傅増湘の思いを明らかにすることにあった。それが「傅増湘の古典学と伝記・詩文に関する基礎的研究」と題した本研究の主たる目的であるが、さらにそれを通して同じように危機的状況にあった中国古典学の再興の手がかりを求めんとした。

３．研究の方法

本研究を始めるにあたっては、すでに数年前から関連調査を開始しており、関連の論文も発表していた。すなわち以下のようなものがそれである。

・稲畑耕一郎「宋蜀刻本『南華真経』附載の傅増湘手書題詩題跋について――台湾中央研究院傅斯年図書館蔵本」、『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第 54 輯、2009 年。P47-67.

・稲畑耕一郎「傅増湘的遺稿――致松丸東魚的書信与絶句」（『中国典籍与文化』第 2 期、全国高等院校古籍整理研究工作委員会、2009）

・稲畑耕一郎「松丸東魚と中国の学者文人たち」（『松丸東魚の全貌――捜秦模漢の生涯』毎日新聞社、財団法人毎日書道会、2009）

・稲畑耕一郎「『宋元書影』をめぐる二三のこと――兼ねて百年前の古籍影印事業について」（『中国文学研究』第 35 期、早稲田大学中国文学会、2009）pp1-16

・稲畑耕一郎「傅増湘と蓬山話舊――失われし時を求めて」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第 55 輯、早稲田大学文学研究科、2010）pp63-76

・稲畑耕一郎、朱新林、李暁紅、石碩「楊守敬致呉重熹信札中的校勘学思想」（『藝衡』第 4 輯、国家図書館出版社、2010）

・稲畑耕一郎「ヴァン･グーリックの傅増湘絶句への次韻詩――印人松丸東魚との交遊のなかで」（『中国文学研究』第 36 期）pp33-47

・稲畑耕一郎「傅増湘與蓬山話舊――追憶似水年華」（『版本目録学研究』第 2 輯、国家図書館出版社、2010）pp67-78

・稲畑耕一郎「傅増湘と『雅言』――伝統詩歌の継承事業」（『早稲田大学文学研究科紀要』第 56 輯、2011）pp3-24

・稲畑耕一郎「傅増湘･松丸東魚･高羅佩――高羅佩次韻傅増湘詩」（『中国典籍與文化』第 1 期、全国高等院校古籍整理工作委員会、2012）pp134-138

「傅増湘の「游記」と「塞外詠」について」（『早稲田大学文学研究科紀要』第 57 輯、早稲田大学大学院文学研究科、2012）pp35-52

・稲畑耕一郎「日本に遺された傅増湘の詩――併せて『東華』と『雅言』の関係に及ぶ」（『文学研究科紀要』第五十八輯、早稲田大学文学大学院研究科、2013）pp3-21

・稲畑耕一郎「《東華》与《燕京唱和集》――近代日中文人漢詩交流的一个足迹」（浙江大学与韓国高等教育財団共同主催《東亜民間交流的歴史与現状》国際シンポジウム論集、2013）pp137-146

・稲畑耕一郎「傅増湘的“紀遊詩”――見於《藝林月刊》之《游山專號》的作品」（復旦大学古籍整理研究所成立三十周年紀年《文本・詮証・伝播：中国典籍與東亜文化交流》会議論文集、2013）

・稲畑耕一郎「傅増湘と避暑山荘――残された「日記」と「詩篇」と「写真」からの考察」（『中国文学研究』第 39 期、2013）pp77-102

・稲畑耕一郎「傅増湘の「居庸雑詠」について――藏園「詠史詩」拾遺」（『文学研究科紀要』第 59 輯、早稲田大学文学大学院研究科、2014）pp17-33

以上のような本研究課題の事前の十分な研究を踏まえて、全体の見取り図はおおよそ明らかになっていた。そこで、日本と中国を中心に傅増湘関連の資料調査をさらに継続することを柱にして研究を進めた。

中国では、北京の中国国家図書館・北京大

学・清華大学・科学院文献情報中心、上海の復旦大学図書館・上海市図書館、南京の南京図書館・南京大学図書館などを中心に文献調査に当たり、新しい資料の発見に努めた。

傅増湘の生まれ故郷であり、進士及第後に夫人とともに3年にわたって滞在した四川省宜賓市江安県に出向いて、関連資料を収集した。

北京では傅増湘の嫡孫で、その著作（上記三種ほか）を整理して出版した傅熹年氏（中国工程院院士）を中国建築技術研究院建築歴史研究所に数度にわたって訪問し、インタビューを重ねた。

さらに、西郊の海淀区北安河郷では傅増湘の父母と先祖の墓を探し出し、その碑文を第一次資料として家系を軸とした伝記調査した。これらはいずれも既存の文献調査だけでは明らかにできないものであった。

日本では、東京大学図書館・東洋文化研究所図書館、筑波大学図書館、京都大学人文科学研究所図書館、関西大学図書館などで文献資料の調査を進めた。その中で、関西大学の内藤文庫では、傅増湘の内藤湖南への書簡を発見し、そこから両者の交流だけでなく、当時の学術界の具体的な様子を明らかにすることが出来た。これも第一次資料の発見からの成果であり、中国で大きな反響があった。

こうした調査の中で、最も力を注いだのは、傅増湘の詩文の収集とその編集である。なぜなら、いわゆる民国年間の大学者の多くはすでに全集、少なくとも著作集は出版されているにもかかわらず、傅増湘については文献学の方面の仕事が嫡孫の傅熹年氏の尽力で整理され刊行されているものの、その他については放置されたままになっており、全集はもとより、著作集も編纂されていないからである。これでは大蔵書家と言われながら、その生涯の全仕事を理解できないのも当然であろう。

そこで、民国期の雑誌等に発表されたものを手始めとして、詩文の収集に努めた。まず、すでに入手していた『蔵園老人遺墨』（印刷工業出版社、1995 年）、『蔵園游記』（印刷工業出版社、1995 年）に収録されている詩文を手がかりに、それらを清末民初の各種のデータベースを利用して検索し、そこから原典に当たるなどの作業を続けた。しかし、データベースはまだ十分とは言えず、周辺の文献調査する過程で発見したものも多かった。

そのような方法での調査研究の成果については、以下に述べる。

４．研究成果

研究成果は毎年継続して、内外の学術雑誌や学会で発表してきた（５.主な論文発表等を参照）。

傅増湘についてほとんど関心を示してこなかった日本の中国古典学の世界ではともかくとして、中国の学界では傅増湘の名は広く知れ渡っている。そこで、論文にせよ、学会発表にせよ、成果報告は中国での公開を主眼としてきた。そこでは、その研究成果が既存の文献学の著作の範囲に留まらず、新たに発見した資料に基づいて論じていることで、高い評価を得てきたと考えている。すべて査読付きの核心雑誌とされるものなどに発表したものであり、そうしたことを踏まえて中国各地の大学や図書館での講演などに招聘された時にも、傅増湘関連のことをテーマとすることが多かった。

一つの具体的な目標としてきた詩文集の編纂については、それぞれの論文で取り上げて論じたものがあり、それらで引用し、言及したものだけでもすでに大半の詩は収集出来たと考えている。ただ壮年の頃の作品については存在の痕跡は確認しているものの原作を探し出せていないものも残った。そこで詩集の編纂は現時点ではなお稿本の段階にある。しかし、ひとまず校勘作業を経て、現存のものだけでも早急に公開し、残りは段階的にそれを補訂することで、完璧を期す予定である。それでも同類の書がないことを考えると、大きな成果になるはずである。

散文については、游記を中心に論文を発表してきたが、若い時期の文章を発掘して、傅増湘の出発点においては同時代の青年と同じように国家の振興や伝統文明の再興について深く考えていたことを明らかにした。後の古典籍の世界へ沈潜するが、それも実はそうした思いと軌を一にする仕事であり、伝統文化への守護と継承を自身の根として傅増湘が強く持っていたことがわかった。

その他、資料として収集できた材料も翻刻することで、傅増湘に関する学界の共通の基本データとする公表していく予定である。

伝記の部分に関しては、その家系の究明や、内藤湖南・松丸東魚を始めとする日本人学者・印人などとの具体的な交流を明らかにしたことも、大きな反響があった。

また傅増湘がただ古籍善本を収集しただけでなく、玉器の収蔵にも関心があり、それに対する造詣も深いものがあったことを、琉璃廠の古物店であった尊古齋の『尊古齋古玉図録』のために書いた「序」の原稿本を探し出して明らかにした。

かくして、この研究期間を通して、当初の目的としていた傅増湘の詩文と伝記の基礎的研究という視点からは一定の確たる成果を上げることが出来たといえる。

しかし、この傅増湘の生涯と詩文の研究は、民国年間の古典学、また近年の日本における中国古典学の問題にまで広げていくための一つの前提であった。そこで、今後は、この研究成果を踏まえて、その方面の研究に歩を進める予定である。

その点では、傅増湘の研究から、傅増湘とも交流のあった思われるオランダのヴァン・グーリックの次韻詩を発見できたことや地理学者であった志賀重昂の漢詩文を取り上げたことは、本研究が次の新たなテーマへと進む明確な基盤を形成できたと考えてい

る。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　7　件）

① 稲畑　耕一郎、傅増湘稀見序文二篇探微――藏園文存之一、中国文学研究、査読有、40 期、2014、pp88-113
https://waseda.repo.nii.ac.jp/

② 稲畑　耕一郎、傅増湘と内藤湖南――新発見の書翰数通からの考察、早稲田大学文学研究科紀要、査読有、60 輯、2015、pp39-56
https://waseda.repo.nii.ac.jp/

③ 稲畑　耕一郎、傅増湘與内藤湖南――以新発現信札進行考察、中国典籍與文化、査読有、93 号、2015、pp148-159
http://kns.cnki.net/

④ 稲畑　耕一郎、傅増湘の「論北方農事書」について――藏園文存之二、中国文学研究、査読有、41 期、2015、pp47-59
https://waseda.repo.nii.ac.jp/

⑤ 稲畑　耕一郎、傅増湘の『藏園老人遺墨』について、中国文学研究、査読有、42 期、2016、pp33-54
https://waseda.repo.nii.ac.jp/

⑥ 稲畑　耕一郎、傅増湘の古玉研究――「尊古齋古玉図録序」考、早稲田大学文学研究科紀要、査読有、62 輯、2017、pp185-202
https://waseda.repo.nii.ac.jp/

⑦ 稲畑　耕一郎、地理学者志賀重昂の漢詩――アラモ遺跡に立つ「漢詩碑」に触れて、早稲田大学文学研究科紀要、査読有、63 輯、2018、pp337-354
https://waseda.repo.nii.ac.jp/

〔学会発表〕（計　7　件）

① 稲畑　耕一郎、傅増湘與内藤湖南――從新発見的信札進行考察、東亜古籍シンポジウム、2014 年、北京大学

② 稲畑　耕一郎、傅増湘の古典学――併せて中国古典の行方について、早慶中国学会、2015 年、慶應義塾大学、招待講演

③ 稲畑　耕一郎、《農学纂要》與《僑工須知》――傅増湘稀見序文二篇考述、中国古典文学与東亜文明国際シンポジウム、2015、国際学会、南京大学、国際学会、招待発表

④ 稲畑　耕一郎、傅増湘・松丸東魚・高羅佩之跨界交流――国際漢学交流之佳話、越州学術論壇、2015、中国浙江省紹興市図書館、招待講演

⑤ 稲畑　耕一郎、関於傅増湘《論北方農事書》、「東亜視閾中的中国古典文献学与文学」国際シンポジウム、2016、国際学会

⑥ 稲畑　耕一郎、地理学家志賀重昂的漢詩――兼論美國得克薩斯州的“阿拉莫之戰紀念碑”、第二屆南京大学域外漢籍国際シンポジウ、2017、国際学会、招待発表

⑦ 稲畑　耕一郎、傅増湘與古玉研究――《尊古齋古玉図録序》考、北京大学第一回古典学国際シンポジウム「中国古代語言、文学和文献研究的古典学視野」、2017、国際学会、招待発表

〔図書〕（計　1　件）

① 稲畑　耕一郎　他、傅増湘與避暑山荘――以游記、詩篇、照片進行考察、日本古鈔本與五山版漢籍研究論叢、査読有、2015、328-345、国際共著

６．研究組織
(1)研究代表者
稲畑　耕一郎（INAHATA　Koichiro）
早稲田大学文学学術院・教授
研究者番号：30063803